

## 女性学のネットワークワーキングをめざして——総合科目の新展開

## 川本 隆史

大学設置基準の「大綱化」ともない、本学は一九九三年度からカリキュラムの大改正を行なった。文化学科においては、「化学原論」を「女性と文化」へと名称変更し、新たに三つの概論科目（現代社会文化論、現代政治経済論、現代科学技術論）を設け、「文化学研究」を「原書講読」へと組み替えた。全学的には、一般教育課程が共通科目へと編成替えされたのだが、その際に旧課程「総合科目」の学年指定を三年生以上にグレードアップすることになり、新規のテーマの一つに「女性論」が選ばれた。新カリキュラム策定を進められた九二年度の教務委員会の見識を高く評価したい。新カリ初年度は「女性と文化」の準備に専念せざるをえなかった私だが、二年目の九四年度に「総合科目D・女性論」を専任としてコーディネートしてほしいとの要請を当時の教務部長から受けた。本学で初めての「女性論」を男である私が担当することへのためらいは残ったものの、女性の専任教員数が圧倒的に少ない跡見の現状を鑑みて一肌脱ぐ決意を固めた。幸い総合科目は、専任一人を含む三人の教員で運営でき、後援会の助成による学外講師を呼べる態勢が確立されている。そこで残り二人のパートナーについては、迷うことなく吉澤夏子、西川直子両先

生にお願いし、快諾を得た。ご存じのように吉澤先生は、一九八六年度より化学特殊講義の兼任講師を勤められ、本誌七号にはアグネス論争に鋭く斬り込んだ「差異の構図——「女であること」の社会的効果」を寄せてくださった。さらに九三年には「フェミニズムの困難——どういふ社会が平等な社会か」（勁草書房）を世に問われている。西川先生については若干の事情説明が必要だろう。彼女は一九九〇年度以来、本学の一般教育フランス語担当の兼任講師として出講なさっていたのだが、昨年度まで戸籍名の堀直子先生で登録されていた。『白の回帰——愛/テクスト/女性』（新曜社、一九八七年）を書かれ、日本のクリステヴァ研究の第一人者である先生が本学に来られていることを、この私自身すぐに気がつかなかったのである。学外の研究会で先生にお会いして名刺を差し上げたとき、「私も跡見に教えに行つてます」と言われたときの驚き——結婚後の女性の姓の問題がここにも顔を出している。

ところが三人の分担を決めて授業内容（シラバス）の原稿も提出した後になって、吉澤先生が九四年四月より日本女子大学人間社会学部に専任として赴任されることになり、跡見との兼務が無

理になった。教務部長とも相談のうえ、急遽ワラをもすが思いでお願いしたのが、昭和女子大学短期大学の内藤和美先生である。私は以前、内藤先生も執筆者の一人である女性学の教科書『女性学——入門から実践・応用まで』同文書院、一九九二年）を書評したことがあり（『フェミニズムへの意志——近作四点を読む』、『週間読書人』一九九二年七月一三日号）、さらに「ケア役割」を女性に固定化する傾向を衝いた彼女の論文を拙論（『介護・世話・配慮』、『現代思想』一九九三年一月号）で引用するなど、理論的な交流を始めたところだった。無理を承知の依頼を内藤先生は快くお引き受けくださり、前期に「女性学」の入門的な講義をしてもらうところまで話がまとまった（あわせて文化学科の専門科目もお願いした）。

さて九四年四月、開講である。新カリキュラムの一、二年生は受講資格がないため、本年度に関しては旧課程の「総合科目」未履修者を中心に五〇人ばかりの登録で落ち着いた（シラパスの脅し文句も効いたのかも知れない）。簡単なオリエンテーションの後、内藤先生の講義が始まる。毎時間詳しいレジュメが配られる熱意溢れる授業に聞き入りながら、西川先生も私もすっかりノートをとった（この私がこの歳になって、女子大学で学生ができるとは思わなかった）。そして七月、会場を図書館ホールに変えて、学外講師の講演が始まった。トップバッターは、斎藤学先生（東京都精神医学総合研究所）の「女性と共依存」。「共依存」（co-dependence）とは、アルコール依存症の治療過程で発見された独特の人間関係であり、相手から依存される状態に自分が依存してしまい、結果としてお互いに依存性を増長してしまうよう

なつながら方のこと。この病理を豊富な臨床例を引きながらユーモアたっぷりに話された。本号には残念ながら講演記録を載せられなかったけれども、この方面に関心をもつ会員は先生の『生きるのが怖い少女たち——過食・拒食の病理を探る』（カッパ・サイエンス、光文社、一九九三年）あたりから読み始めるといい（講演テープは文化学科研究室に保存してある）。

暑い暑い夏をはさんで、後期からは学外講師のオンパレード——九月二〇日の加藤春恵子先生、一〇月四日の金井淑子先生、十一月八日の皆川美恵子先生、一五日の福井憲彦先生、二二日の吉澤夏子先生。目次を見ればお分かりのように、以下の小特集は右の講演シリーズに基づいている。そして授業の最終回では、出席者に一年間の感想を自由に話してもらった。九月にも一度、履修の動機などをフリートークキングしたが、こうした学生からのフィードバックは今後ともぜひ試みたい。加藤先生の講演冒頭に出てくるCR（意識高揚）の疑似体験にでもなればと思う。この最終日の総括討論の模様は、西川先生がポイントを見事にまとめてくださっている。先生自身の講義は、学外講師の合間を縫うかたちで行なわれた。近代のフェミニズムの原点メアリ・ウルストンクラフトから始まり、ポヴォワールをリベラル・フェミニズムの到達点およびラディカル・フェミニズムの源流として位置づけられた。ついでラディカル・フェミニズムの検討に移り、精神分析派フェミニズムから現代フランスのフェミニズム（シクス、イリガラ、クリステヴァ）の紹介で結ばれた。日程の都合で先生の本領がじゅうぶんに発揮されなかったので、新年度はもっと時間を差し上げて、思う存分語ってもらおうと計画している。

本年度の私はコーディネーター役に徹したつもり。しかしながら西川先生のためにもあるように、受講生には「女性という限定を冠した学への疑念・不安と同時に、男女を越えた普遍的人間像・人間関係論への欲求」があることも確かであり、男というジェンダーを生きている私が危うい場所からでもあえて「女性論」について発言していく責務を負っていることを実感させられた。また加藤先生が講演で指摘されているように、女性学教員が「第二の母」の役割を背負わされたり、女子学生との相互的ダブル・バインドに陥る危険性があるとすれば、男の女性学教員が一種のカウンターバランス役を演じる出番はあるかもしれない。とありえず私の守備範囲でカバーできるのは、キャロル・ギリガンの『もうひとつの声』（川島書店、一九八六年）が巻き起こした論争とフェミニズムの規範論理の活発な展開である。これについては、私の『現代倫理学の冒険——社会学論のネットワーキングへ』（創文社、一九九五年）の第一部第五章で簡単な分析を加えておいたので、参照いただければ幸いである。そもそも私がアメリカの女性学（“women's studies”であつた、“studies of women”ではないことに注意！）に内在的な関心を寄せるきっかけとなったのが、ギリガンとの出会いだった。彼女は、ピアジェやコールバークの道徳発達理論が建前では「人間一般」を対象としていながらも、実は男性の発達プロセスを基準にしており、そのため女性の発達を十全なかたちで把握できないことを暴き出し、女性が道徳上の葛藤（妊娠中絶に踏み切るかどうか、など）において語ることに耳をすませて、従来の理論に欠落していた「ケアと責任の倫理」とその発達の理路を描き出した。倫理学が「人

間の学」たらんとする限り、ギリガンの問題提起を真剣に受けとめ、おのれの男性中心主義的な偏りを是正する努力を惜しんではならない、と私は考えている。

一年間の授業運営を通じて、女子大学のカリキュラムに「女性学」関連科目を設置することの意義を改めて痛感した。最終日の討論で内藤先生が「女子大学は女性の自尊心を培う場として大事だ」と強調されたこともつよく印象に残っている。この特集を足場にして、新年度からさらに「総合科目・女性論」を充実させたい。なお学外講師の講演（原則として火曜日の二時間目、年間五名を予定）は、会員の皆さんにもオープンにするつもりであるので、参加希望者は日程などを文化学科助手に問い合せていただきたい。「女性と文化」および「女性論」を核にして、本学に女性学のネットワークを徐々に広げること——これが私の密かな（公然たる？）ねらいである。

（かわもと たかし・倫理学）